日本の山岳における野生動物管理の課題

泉山 茂之（信州大学）

近年、ニホンジカ（Cervus nippon）が日本アルプスの高山にまで進出し、亜高山帯上部の稀少な高山植物群落の採食利用が定着するようになり、豊かな山岳環境の象徴とされる「お花畑」の消失が危惧されている。1984年に実施した、演者による南アルプス北部の山小屋を対象としたアンケート調査からは、ツキノワグマやカモシカ、ニホンザルの生息情報は多数あったが、ニホンジカの生息情報は皆無であった。ニホンジカによる、亜高山帯のシラベ、アオモリトドマツなどの常緑針葉樹林やダケカンバ林、草本群落の利用は、1990年代後半から始まり、2000年代に入り定着した。ニホンジカによる亜高山帯の利用はさらに進行し、わずか10年ほどの間に、「お花畑」は失われることになった。

現在、ニホンジカの分布の拡大は北へと拡大し、北アルプスでの定着が進んでいる。北アルプスでのニホンジカの調査は2011年の秋期から始め、2022年春期までに麻酔銃による生体捕獲を実施し合計62頭にGPS発信器を装着して、行動追跡調査を実施してきた。この結果、夏期間に北アルプス側で生息する個体の多くが、冬期間は積雪が少ない大町市八坂や美麻、信州新町などの東山地域に移動し越冬する「季節移動」をする個体であることがわかった。そして成獣個体の多くは、毎年同じ季節移動のパターンを繰り返した。北アルプス山麓で捕獲した個体は、秋期には木崎湖の北側を、西から東へJR大糸線や国道148号線を夜間に横断して越冬地に向かった。また春期には、逆に東から西へほぼ同じ場所を横断して、北アルプス山麓へ向かった。また、ライトセンサスによる個体数調査からは、北アルプス山麓において、ニホンジカの群れサイズは年を追って大きくなり、着実に定着が進行していることが明らかになった。

ニホンジカの高山環境への進出により、「お花畑」が消滅した南アルプスでの事例が報告され、山岳関係者の間での危機感が共有され、北アルプスでは2014年度から本格的な対策が始まった。例えば、有害捕獲の実施により、ニホンジカの行動にはどのような変化があるのだろうか。「巻き狩り」は、「勢子」が数十メートルおきに配置してシカを追い出し、区域内から逃走するニホンジカを射殺するという捕獲方法である。しかし、GPS首輪を装着した個体を含む数頭の個体は、40名の「勢子」と「勢子」との間をくぐり抜け反対方法に逃走した。新たな越冬地は、人が入り込むのが困難な地形が厳しい地域であった。翌年、この個体は「巻き狩り」を実施した区域を越冬地としては利用せず、より遠くの新たな地域を越冬地として利用した。結果として、有害駆除の実施によりニホンジカは逃走し、より安全な場所を探して越冬地を開拓して行ったのである。このように有害捕獲を実施した結果、ニホンジカはより遠くに逃走し生息地が拡大し、有害捕獲はより困難になってゆく。ニホンジカは自身が生き残るためにさまざまな形で行動を変化させるという、優れた対応能力を持ち合わせていることが明らかになった。